鈴の音

岡部伊都子

鈴の音

岡部伊都子

創元社

鈴の音

©昭和四十五年四月十五日初版
昭和四十五年五月十五日二版

定価六〇〇円

著者　岡部伊都子
発行者　大阪市北区樋上町四十五番地　矢部良策
印刷者　大阪市浪速区元町五丁目五百六十三　伊藤佐久馬
発行所　大阪市北区樋上町四十五番地　創元社
郵便番号五三〇

1970 Printed in Japan（安田製本）

目次

鈴の音

鈴の音……3　冬苔……4　虫たち……5　炎シクラメン……6　雛の膳……8　うるおい……9　おはぎ……10　夢……11　ブランコ……12　花むすび……13　花まつり……14　椿のレイ……15　小豆あん……17　さくらの小枝……17　桜の木……18　さくらのお湯……19　美しいお葱……20　なかこ……21　とろろ芋……22　お魚の顔……23　棕櫚……24　いい仕事……25　花さばてん……26　ぎんりょうそう……27　枝豆……28　ブロッコリーの芽……29　くちなしのくるま……30　あんぷ……31　魚の知恵……32　バラのジャム……33　さつま芋……34　孤輪月……35　花と鳥……37　桂飴……38　蜂……39　萩を焼く匂い……40　平泉……41　大根だき……42　お年玉……43　夜なかのお餅……44　エプロンで……45

美しい炭

その基本……47　端切れ……48　真綿……49　慰め……50　針供養……51　色襟……52　一葉人形……54　家具たち……55　縞木綿の服……56　お軽うさま……57　やさしさ……58　藁ぶきの屋根……60　古い毛布……61　紺の

八掛……62　レポート……63　庭づくり……64　オルゴール……66　眠る部屋に……67　固いふとん……68　薬の毒……69　こわさ……70　絶対に……71　打ち水……72　勲章……73　ただいま……74　会話……75　ことば……76　一畳の広さ……77　お化粧……78　ねまきゆかた……79　右左……80　舞台……81　自分の姓名……82　その生きた餌……83　毘売塚……84　足袋の白……86　地方の歴史……87　個人……88　机……90　古い着物……91　歩く……92　美しい炭……93

可能性の声

可能性の声……95　名前……96　あと味……97　ふた子の人形……98　こんにちわ……99　忘れた靴……101　鯉……102　お願いだから……103　日本の大学……104　手紙塚……105　とうろうのおの……106　四号名刺……108　母の姿勢……109　白い花……110　子は……111　悲しくなる……112　親切……113　父……114　母の不幸……115　たたいては……116　子を恋しがる母……117　髪の匂い……118　おことわり……119　大母性……120　家族間の媚……121　年齢……122　母の怒り……123　女らしさ……124　寒の内……125　八〇歳のこぶし……126　陽気に……127

自由な鶴

夢二式女人……129　女と男……130　めでたい出発……132　質素……134　手型

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

……135　慎重な人……136　愛の日……138　光が……139　愛……140　結婚は……141　うれい無きにあらず……142　花むしろ……143　ね、どうして……144
愛の厳格……145　愛の窒息……146　椅子と靴……147　親鸞忌……148　相手……149　恋人……150　愛の意味……151　結婚したい女性……152　ある結びつき……153　紳士の恋……154　女の子……155　今ひとたびの……156　自由な鶴……157

どこへ行った

どこへ行った……159　勝手な題……160　厄年……161　未来……162　ガラのタリ……163　ある作品……164　赤十字の日……166　盲点……167　しずけさ……168　きく心……169　雨の図書館……170　美しい光……171　いのちがけ……172
鉛筆……173　見てござる……175　バカな人間……176　おだんご哀話……177
すばらしいガイドさん……179　若いあんまさん……180　指輪……181　一九歳の八釣さん……182　ろうそく……184　打ち明ける……185　いい気風……186
目立たないで……187　けざやか……188　笑い……189　枕……190　民衆の成長……191　道づれ……192　梅干……193　自分のことば……194　世界の夢……195
水相場……196　蔵書……197　のりこえた魅力……198　一億円……199　禁のつや……200　てのひら……201

夢の記

ゼロゼロ……203　傍線……204　果然……205　白くなりたい……206　お経……207　ある花園……208　三蔵法師……209　おじゅず……210　おそろしい証拠……211　北斎の画稿……212　駅で……213　六人の方……214　知りたい真実……215　古文化展……216　雪のお墓……217　生きることはよいもの……218　人間……219　孤独の底……220　現代の第五……221　海の底……222　モオパッサンの勲章観……223　まともな力……224　悲しいこと……225　直面……226　つかまらないもの……227　アパッチ……228　友人……229　子規忌……230　実存記号……231　具体的……232　愚行……233　美しい姿……234　難破……235　悪石島……236　しつけとは……237　孤独の距離……239　時機……240　世界赤十字の日に……241　共感……242　モームのプレゼント……243　ハイネ誕生日……244　人権週間に……245　らんちゅう……247　人間の音楽……248　民族の味……249　トスカの叫び……250　夢の記……251

あとがき

伊都子著書目録

鈴の音

鈴の音

鈴の音

どういう目的でつくられ、どういうわけでそれがつくられなくなったのか、日本のなぞの一つに数えられる銅鐸は、そのうちの古いものはそれを振って鳴らしたものかといわれています。つまり、吊鐘のように、そとから叩いて音をだしたのではなく、振って、中で金属をあてて音をだしたらしいのです。出土した古い銅鐸のなかには、その内部が振子で磨滅したものがあるのだそうです。まるで大きな鈴のようなものですね。

鈴といえば、そのチロチロと鳴る愛らしい音は、思いがけないやさしい気持を誘いだすもの。ひとり住いのわたしに、できるだけやわらぎを与えようとしてのことでしょうか、鈴のついたテープを三、四本、下さった女性がありました。

いつか、のれんの先に鈴をつけて、そののれんをくぐるたびに、たのしい思いをしたことがあります。今度は、どのようにして、この鈴を生かそうか……と考えていましたが、結局、そのテープを、応接室、仕事部屋、洗面所などの、ドアのとってに結びつけました。そして、みかんをいっぱい盛った中国産の籐の籠にも一つ、吊しておきました。

部屋のドアをあけたてするたびに、自然に鳴る鈴の音がします。おみかんを一つ、とその籠をすすめるたびに、チリリンと鳴ります。しずけさが、この小さな音があるためにかえって深まるようで、客人もふと「何か鳴りましたね」とか「いかにもデリケートなお住いですね。ひとり住いにはうってつけの、可愛い音ですね」などといわれます。ひとりで、仕事に追われている時も、事務的にドアを開けたてしながら、鳴る鈴の音を聞きとめます。

そうそう、電話の、受話器にも、一つつけておきました。受話器をとりあげるたびにテープがゆれて、ちょうどその話し口のあたりで、鈴が鳴ります。これは、わたしが聞き手になったことがありませんので、効果はわからないのですが、少なくとも、わたしは鈴の音を聞けるのです。

冬　苔

苔は、ほんとは冬のほうが美しいのだということを、はじめて聞いておどろきました。有名な苔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

寺、嵐山の西芳寺をたずねるにも、いつも雨の多い梅雨のころがよいように考えていたのです。

でも、ツンドラ地帯に繁殖するのはただ苔だけ、雪の降る寒いころの苔が、いちばん美しいのだといわれると、なるほど……と心をうたれます。このようにわたしたちは、ほんとにそのもの自体の在りかたを見ないで、先入観でものをとらえることがきっと多いことでしょう。

いちばん大切な骨だと思っているところが抜きとられて、つまらないところに関心をもたれている。ほんとに正しい、いちばん見てもらいたいところ、見なくてはならないところがかえりみられないままなのを、どういうふうに是正してゆけばよいのでしょう。

ただ一つ、なんでもない苔の見ごろということを教わって、急に不安になりました。

虫たち

冬の間、地の下でねむっていた虫たちが長い冬眠から目ざめて地上にはいいでる節を、啓蟄と申します。今日はその啓蟄。わたしも、虫のようにこの日に一つの存在として世の光を見た者なので、虫たちに対して何か親しい仲間のような気がいたします。

冬眠というのは、たしかにいのちを持っている状態。そして、たしかに存在の形態を主張しているもの。ですけれど、そのもの自体には、生きている自覚も感覚も何もない状態と申せましょう。

わたしの過去にも、たしかに生きているのに、その思い出すら考えられないような時期がありました。その、こごえていた自分の姿は、思いだしてもみにくい感じでたまらないのですが、かといって、その時期を経てはじめて今まで、生きつづけることができているのです。

その人間としての冬眠をやぶったのもやはり春。それからの一〇年は、じつにさまざまの思いでこの啓蟄の日を過してきました。わたしは、自分が人間として存在したことが、しあわせであったと思えず、また、わたしのまわりの人をしあわせにしたとも思えないのですが、それだけに厄介をかけた人々に対しての、感謝の気持は深いものがあります。

一つのいのちが存在するとき、そのいのちの育つために、どんなにたくさんの力が必要なことでしょう。その存在のために、どんなに傷つく人が多いことでしょう。自分の誕生日を、おわびとお礼の気持を持たずに過すことができません。

炎シクラメン

ベルの音にでてみますと、思いがけなく美しいシクラメンの鉢だけが門の上に見えました。英語の手ほどきをしてくださった先生が、まるでいたずらっ子のようにそれをさし上げていらっしゃるのでした。

シクラメンはシリヤ原産の多年生草本。ご存じのように紅やピンク、白など、いろんな色の種類があります。別の名を「かがり火草」というように、あの花は下を向いて、花びらが逆に天にむかって立っています。燃えさかる炎のようで、紅の花なら、さしずめ紅蓮の炎とでもいうところでしょうか。

わたしは白い花が大好きで、純白のシクラメンもまた炎のように思うのです。白い炎は、赤い炎よりもいっそう熱度が高いと申します。高度に燃焼する姿は、あさいたかぶりよりもかえって静かでさびしいものなのでしょう。

次から次へと、葉の下に小さな蕾の首をあげ、冬中を燃えつづける美しいシクラメンの花。その鉢植を下さった先生が、美しい女性の身でありながら、混血児であるため、世の口さがない扱いに耐えぬいて生きてこられた方なのも、心にしみます。

「人間にはどんなみにくい人にでも、はっと美しいものを他の人に感じさせる瞬間があるものですよ。ともかく一生懸命に生きよう、いいことをしたいと思う心を大切にしてわたしは生きてきたんです」とお話しになるその先生は、全身でシクラメンの花びらのように美しい生命の炎を燃やしつづけてこられたのでした。

雛の膳

打合せや、録音の仕事に来られた方々に、お雛(ひな)さまの模様のついた、小さなお茶碗やお皿で、ひとくち、お菓子がわりの赤飯をもてなしました。

独身、既婚、中年などの、年齢や環境の違いを別にして、そのお膳の可愛らしさに、涙ぐむような感動を見せられたのは、かえって男性のほうに多く、それにはこちらがおどろいてしまいました。ままごとは女の子のもの、あまり、男の子は、愛らしいものを楽しまないのだと、勝手に決めていましたので。

「こんな生活ぶりははじめて見ます。これは大阪のしきたりですか」などといわれると困ってしまって、こういう楽しみをすることが、生きる目的ではないこと。大阪のしきたりではなく、ただ自分の生活の一つであること。こういうことをかえりみもしないで理想にむかって努力するのが当然ですけれど、その努力の一方で、ちょっとした季節のよろこびを大切にしたいと願っていること、などをお話ししました。古い古いお雛さま用のお茶碗やおわんなどの残っていることに、急に豊かなうれしさを感じたのです。

うるおい

この間、わざわざ手作りのお料理を持ってきてくださったお友だちがありました。その方の仲良しに、心をこめてすがすがしい料理をつくる方がいらしって、れんたんの上で、ことこと煮ふくめたという林檎、とうがらしとレモンを散らしたかぶらの菊の花など、見ただけでも美しい料理の花たばです。

「材料は皆、安いものばかりで……だから百円料理です。」

などといわれるのですが、どうしてどうして、そのこまやかな風味、甘すぎず、行き届いた味は、絶品といいたいほどの味わいでした。材料代にかかわらない心づくし。この、おいしいものを届けようとして、心をこめて作ってくださった人、そしてそれを運んでくださった人へのありがたさを、しみじみいただきました。そして、経済の力だけではできない、人間の尊さを味わいました。

亡くなったわたしの母も、経済的にどん底におちた貧しさの最中でも、少しでも人においしいものを食べさせたいと、熱中する人でした。ありあわせの乏しい材料で、たとえひと品でも気のきいた、心のこもった料理をつくって、それをすすめていかにも満足そうだった母の、おからや、千切り大根の味が、口に残っています。

小さなひとくちおむすびのそばに、庭の草や、花を飾ってもてなしをする母でした。母があの、何もなかった戦中戦後、そしてその次に見舞った破産の貧乏のなかにも、ちっとも心のうるおいを失わずに、生き生きと純真な心で生きてきたことの基本に、料理への愛と、人さまにふるまうことの好きな気性があるのでした。

あんなに人にごちそうすることが好きだった母は、きっとあの世でも、飢えの苦しみだけはしていないでしょう。貧しくても人をうるおわせる、おいしい料理を届けてくださる心が、ありがたいのです。

おはぎ

半端(はんぱ)ものばかり並んでいるうちの食器棚に、二〇人前やっとそろっている古いお皿を見ますと、いつもお彼岸のお供養をつくった幼い日のことを思い出します。おはぎにしろ、おすしにしろ、前の晩から用意しておいた材料を、つぎつぎと煮たり刻んだりしてゆく楽しさ。ふだんの日よりもカン高い声をはりあげて女たちは気負っていました。幼くても一心に、大豆をひいて、かんばしいきな粉をつくったあのときのうれしさを思うと、やはり少々じゃまになっても、小さな人たちを参加させたごちそうづくりに意味があるのだと思われます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.